

聖マリア国際協力ニュース

第 115 号

平成 22 年 3 月 1 日発行

ハイチでの国際緊急援助活動

臨床検査室 南島友和

私は日本時間 1 月 13 日（水）に発生した中南米ハイチ地震災害の救援のため、2010 年 1 月 16 日～1 月 29 日の期間、国際緊急援助隊医療チーム（JMTDR）の一員として活動しました。活動地は首都（ポルトープランス）から約 40km 離れた、まだ他の医療チームが入っていないレオガン（人口約 10 万人）という都市でした。現地では暴動や略奪が頻発しており、危険なため、国連 PKO 活動中のスリランカ軍の護衛を受けながら、現地時間 18 日より診療活動を開始しました。



受付でのトリアージ

そこは震災後 6 日を経過したとは思えない程の酷い状況でした。重症の外傷患者が多く、特に骨盤骨折、開放骨折、創部壊死を負った方が多数訪れ、処置に大変時間を要し、受付はすぐに飽和状態となりました。その後 2、3 日は重症の外傷患者ばかりでしたが、徐々に外傷患者は軽傷化し、かわりに小児科や内科疾患の患者が増えました。最終的に 8 日間の活動で延 534 人（初診 432 人、再診 102 人）の患者を診療しました。

私の JMTDR での活動は、主に受付でトリアージを行い、専門である検査部門においては、超音波検査や血液検査を行いました。活動中の気温は日中 35 度前後にも達し、診療 tent 内部では 40 度を超える過酷な日々でしたが、隊員たちは皆ハイチ人へ心ある医療を提供し

ようと一丸となり活動を続けました。私たち JMTDR の活動は 8 日間のみで、まだ多くの患者が残されており大変心残りでしたが、自衛隊医療チームが活動を引き継ぐ事が決定され、私たちは帰国することになりました。

現地では一番印象に残ったことは、たいへんな被害を被ったにも関わらず、我々に笑顔で話しかけてくれる避難民キャンプの子供達や、私たちの活動を共に支援してくれた現地の看護学生さんの強さです。また、私が診療を担当した女の子が御礼を言いたいと、診療後に会いに来てくれたことがありました。それまで無我夢中で日々の診療に追われ、心に余裕が無かった私でしたが、この時、この地で頑張って活動し本当に良かったと思いました。



明るさを失わない人々

私にとって、海外での医療活動は初めての経験でしたが、聖マリア病院の基本理念である『カトリックの愛の精神』を胸に、これまでの経験で積み重ねてきた知識・技術を活かし、頑張ることができました。これは、当院の医療技術の高さや、JMTDR の研修に幾度も参加させてくださった当院のバックアップがあつての事です。今回の貴重な経験を今後の糧としたいと考えております。また大変忙しい中であるにもかかわらず、私の派遣を承諾してくださった理事長、病院長をはじめ、関係者の皆様に深く感謝を申し上げます。

JICA 研修員より感謝のこぼれ

研修員を代表して、聖マリア病院での研修に協力していただいた病院職員の皆様に感謝を申し上げます。私たちは発展途上にある国々からやってまいりました。また私たちの国の保健システムもやはり発展の途上にあります。そんな私たちにとって、今回の研修プログラムは、知識と実習の場を得ることができるたいへん貴重な機会でありました。

私たちは聖マリア病院での研修が始まる前、JICA 九州国際センターにて日本の文化・歴史についての講義を受講する機会がありました。そこで、日本人は近代的な生活様式を取り入れながらも、伝統的な秩序を保っていることを知りました。聖マリア病院もまた同様に、近代的でありながら、患者に対する細かな気配りなど、伝統的な日本の美点を活かした運営が成されている病院だという印象を強く持ちました。また常に業務改善を実行しつつ、長期的な展望に立った運営計画が策定されている点は、本当に素晴らしいと思います。

聖マリア病院の職員の皆様は、とても親切に各部門の業務システムを見せてくださいました。そして、常に笑顔で、どのように業務改善が実行されているのか教えてくださいました。皆様がこれまでに達成された成果を、決して隠すことなく、私たちに示してくださいましたおかげで、私たちが所属する組織を今後どのようにして改革

タティアナ・バエウスカ・ヴチュコヴィチ

し、改善していくのが検討することができるようになりました。

私たちは、皆様が親切で、礼儀正しく、常に笑顔でたたえておられる姿に感銘を受けております。また、皆様のホスピタリティの精神、業務に対するプロフェッショナルな姿勢、時間に正確であることについて、ぜひ私たちも見習わなければならないと感じております。

最後に、この美しく素晴らしい国で、有意義で楽しい時間を過ごすことができたことに対して、あらためて感謝を申し上げます。Domo arigato gozaimashita.

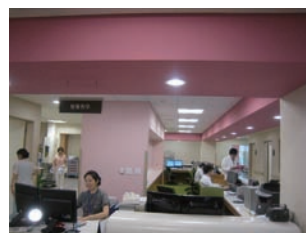
※筆者のタティアナさん（マケドニア国）は 1 月 25 日より 2 月 19 日まで実施した JICA 研修「南東欧地域医療施設運営」の研修員（8 名）のお一人でした。



研修修了式 ※前列左より二番目の女性が筆者

韓国での研修を終えて

2008 年 6 月から 2009 年 12 月まで約 1 年半、「韓国の医療制度、医療保険制度を理解する」目的で韓国カトリック大学ソウル聖母病院（旧カトリック大学江南聖母病院）にて研修させていただきました。



研修で訪れた入院院務チームの窓口

外来院務チーム、入院院務チーム、適正診療チーム、医療情報チームにて研修をさせていただきましたが、この病院ではすでに EMR（電子カルテ）が導入されており、紙カルテは一部しか残っていない状況でした。外来や病棟での業務、保険請求、顧客管理、決裁など、あらゆる業務が IT 化されていました。紙カルテから EMR へ移行するまでにはたいへんな苦労があったと思いますが、今では殆どの職員が EMR に慣れており、スムーズに業務が実行されていました。ちなみにソウル聖母病院の病床数は 1200 床、一日の平均外来患者数は約 5000 人、平均入院日数は 6.7 日です。数多い患者の対応をスムーズに実行するためには、外来や入院に関わる業務を迅速に行なう必要があるため、EMR の活用だけでなく、職員全員が病院全体の IT 化推進に全力を尽くしていまし

韓国人研修生の長崎研修旅行に同行して

2 月 27 日、韓国カトリック医療協会研修（技師グループ）の長崎研修旅行に、薬剤科を代表して私たち 2 人が同行しました。毎年、韓国からの研修生を薬剤部で受け入れています。個人的には、これまでごく限られた時間しか研修生と接触する機会はありませんでした。今回、もっと長い交流の時間が持てればと思い、研修旅行の同行を希望したというわけです。



原爆資料館の玄関で

当日、長崎地方は雨天と予報されていたのですが、幸い雨にたたられることなく、原爆資料館、平和公園のほか、26 聖人殉教地、大浦天主堂などカトリック関連の施設を巡ることができました。今回の研修生の方々はいずれも日本語をよく勉強されており、驚くほど上手に日本語を話せる方も数名おられました。日本の歴史にも大いに関心があるようで、原爆資料館の展示物に添えられているハンガルの解説文を丹念に読み込んでおられる姿が印象的でした。また大浦天主堂や 26 聖人殉教地では、通訳の池田先生の説明に熱心に耳を傾けておられ、その真剣な態度に、敬虔なカトリック信者の姿を垣間見た気がしました。

研修生との交流を希望して参加したものの、最初のうちは緊張感から、なかなか話しかけることができませんでしたが、しかし、持参したお菓子や飲み物を勧められたりなど、研修生の方から気を使ってくくださったおかげ

国際事業部 高和珍

た。韓国は診療報酬が日本より安いので、病院の経営のためにも顧客管理が非常に重要視されており、「患者数を維持するために最善を尽くさなければならない」という意識が全職員に浸透しているように思われました。また職員間のコミュニケーションについても IT 化が進んでおり、電子決裁や職員間のチャットシステムなどが効果的に使われていました。



温かく迎えてくださった職員の方々

私が研修を受けていた期間は、ちょうど江南聖母病院から新たに建設されたソウル聖母病院へ移行する忙しい時期でしたが、病院職員の皆様は温かく私を迎えてくださり、また母国で研修を受けられることをとても嬉しく感じました。今回の経験を活かし、これからの韓国との交流の架け橋になり、より深い相互交流ができるようにお役に立てたらと思います。

1 年半の貴重な研修の機会を与えてくださった韓国カトリック医療協会の関係者の皆様、ならびに井手理事長、島病院長を始め、聖マリア病院の関係者の皆様に感謝を申し上げます。

薬剤科 大村光、松尾美咲

で、しだいに緊張も取れ、打ち溶け合えるようになりました。そして中華料理店での昼食では、チャンポンや血うどんの食べ方を教えてあげるうちに、よりコミュニケーションが促進され、仕事のことや、日本と韓国の文化の違いについてなど、いろんな話で盛り上がりました。また私と同じテーブルに薬剤師の研修生がいらしゃったので、日本と韓国における薬剤師の役割の違いや共通点について知ることができ、勉強になりました。



26 聖人殉教地の記念碑前にて

今回このような有意義な経験をさせていただき、感謝いたします。この経験をきっかけに、今後は韓国の人々とより深い交流ができるよう、勉強していきたいと思えます。

今月の動き

【派遣】
・3 月 7 日（日）～ 13 日（土）
杉本孝生（国際事業部）、井福武志（臨床工学室）、「南東欧地域医療施設運営コース」のフォローアップのため、サラエボ（ボスニア・ヘルツェゴビナ国）へ派遣。

